

Title	日本近代文学におけるアイルランド文学受容：芥川龍之介・菊池寛・西條八十・伊藤整
Author(s)	鈴木， 暁世
Citation	大阪大学， 2010， 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57852">https://hdl.handle.net/11094/57852</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【21】

氏 名	すずき あきよ 鈴 木 暁 世
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 3 4 7 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	日本近代文学におけるアイルランド文学受容－芥川龍之介・菊池寛・西條八十・伊藤整－
論 文 審 査 委 員	(主査) 准教授 橋本 順光 (副査) 教 授 出原 隆俊 教 授 中 直一

#### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、大正期の日本においてアイルランド文芸復興期の文学・戯曲が、盛んに翻訳・紹介されたという「流行」現象が起きたことに着目し、アイルランド文学が芥川龍之介、菊池寛、西條八十、伊藤整らの文学者によって、どのように受容され、あるいは変容していったのかを詳細に跡付けた力作である。

第一章では、序章として、明治期の『太陽』『明星』『帝国文学』『早稲田文学』『新思潮』『假面』『スバル』等の雑誌に掲載されたアイルランド文学紹介記事の言説が精査され、明治期におけるアイル

ランド文学の受容の様相と、「ケルト」イメージが形成されていった経緯が説明される。

第二章では、芥川が、西條八十や日夏耿之介らが一九一四年に結成した「愛蘭土文学研究会」に参加し、アイルランドの作家シングやイエイツらの研究を行っていたこと、その研究成果としてイエイツの作品を翻訳し、『新思潮』において芥川が「愛蘭文学号」を準備していたという事実関係が、『新思潮』『假面』等記事や書簡に基づいて整理される。さらに、芥川の真筆が疑われてきた「シング紹介」（一九一四）が、芥川龍之介旧蔵書の Maurice Bourgeois, *John Millington Synge and the Irish Theatre* (London: Constable, 1913)からのほぼ引き写しであることが指摘され、芥川が執筆した可能性が示唆される。

第三章では、さらに、芥川の初期未定稿戯曲「弘法大師御利生記」（一九一四）におけるシングの『聖者の泉』（*The Well of the Saints*, 1905）の影響が指摘され、その際に「放浪者」という登場人物像が強調されていることが特筆される。

第四章では、芥川龍之介の「歯車」（一九二九）とジョイスの『若い芸術家の肖像』（1916）が比較される。伊藤整や川端康成に先駆け、芥川がいち早くジョイスを受容していたことに着目し、文体の変革という観点から、芥川による『若い芸術家の肖像』翻訳草稿及び「少年」（一九二四）、「歯車」が分析され、その文学史的意義が強調される。

第五章では、菊池寛の戯曲がダブリンやロンドンで激賞され、「屋上の狂人」（一九一六）の翻訳戯曲 *The Housetop Madman* がダブリンのアベイ座で上演された事実が発掘される。菊池寛は、イエイツによって「日本のシング」とまで評されるが、それが菊池寛におけるシングの受容に起因することが明らかになる。菊池は、アイルランド文芸復興運動における「脱英化」、すなわち中心からの自治と独立という側面に感応し、「文壇中央集権的傾向」に対抗して「京都文芸復興運動」の立ち上げを目論んだ。菊池は、「屋上の狂人」とシングの『聖者の泉』の「思想」が同一だと述べており、日本文学とアイルランド文学が、一方的な受容にとどまらない相互交渉の側面もあったことが述べられる。

第六章では、芥川と「愛蘭文学研究会」で共にアイルランド文学を研究しながらも、『新思潮』『假面』の誌面上で論争するなど、芥川とはやや距離を置いた西條八十におけるアイルランド文学受容が考察される。第一詩集『砂金』（一九一九）に収載された詩篇「芒」に、西條が熱心に読んだイエイツ『葦間の風』（*The Wind among the Reeds*, 1911）の幻想的な詩風からの影響が跡付けられる。だが、西條は、次第に、イエイツの作品を「幻想のための幻想」と位置づけ、シングの「愛蘭農民の想像性」をより高く評価するようになり、文芸復興運動がアイルランドの自治・独立運動と不即不離であることも強く意識しはじめる。それが、オーストリア=ハンガリー二重帝国からの自治・独立を願うチェコの詩の紹介と翻訳へとつながり、詩風の変化とも連動したことが示唆される。

第七章では、終章にふさわしく受容第二世代の伊藤整『若い詩人の肖像』（一九五六）におけるアイルランド文学の意味が取り上げられる。『若い詩人の肖像』では、「植民地」北海道の小樽高等商業学校に入学し、京都帝大出身の同郷の教授の授業で「シングのアイルランド劇のテキスト」を講読する一九二〇年代の「私」が描かれるが、そこに菊池寛らの京都文芸復興運動の残響が示唆される。こうして、アイルランド文学受容からはじまった中心と周縁の力学が第二世代によって変貌し、流用されていった過程が確認される。

## 論文審査の結果の要旨

大正期におけるアイルランド熱については、幻想文学的な受容と自治独立運動に関する受容と分離して研究されることが多く、両者が個々の作家において絡み合いながら受容し、変容していったことを編年で跡付けた本

研究は、初の通史として画期的な意味をもつといえる。できる限り初出誌にあたり、作品の発表された場とその力学を描くため、ほぼ毎ページに精細な注を付した本文は 262 ページ(400 字換算約 700 枚)におよび、さらに文献表 16 ページと年表 20 ページが続く。この年表には、1880 年代から 1950 年代にかけての関連記事が埋め尽くされ、この年表だけとつてもみても、斯界に資するところはきわめて大きい。

時代にそって事象を活写しつつも、平板な歴史的記述にとどまることなく、作家作品論として新発見と新知見が盛り込まれており、個々の論文の完成度が高いことも、審査において高く評価された。先行研究への目配りは無論のこと、蔵書やその書き込みの精査によって精緻に論が組み立てられており、その水準の高さは、1つの章が専門の学術雑誌に、3つの章が紀要および科研報告書に巻添へて掲載された事実をとってみても明らかといえるだろう。いうまでもなく、初出論文は大幅に改稿されており、博士論文として一貫性の高い内容に仕上がっている。

ただ、第二章において、「シング紹介」が芥川の蔵書の引き写しだとしても、それが真筆である証拠とまでいえるかどうかについては、あくまで瑕疵にとどまる勇み足の範囲として疑義が呈された。また、主に四人の作家によってアイルランド文学受容の全体像を描く試みは、当然ながら、参照すべき無数の文脈と作品を割愛する作業にはかならず、言及があつてよかつたであろう主題も、いくつか指摘された。たとえばアイルランド文学によって見立てられた中心と周縁という図式が、おりおりの政治力学によって被る適用範囲の経年変化、あるいは、滅びゆく種族という点で、幻想と自治の問題をもつともつなぐはずのフォークロアに対するアイルランドの強い関心と日本での受容、アイルランド・インド・日本などの「周縁をつないだ(神智学的)ネットワークなどがそれにあたる。

しかし、これらの主題は、むしろ本研究によって切り開かれた新たな地平ともいうべき問題群であり、今後、本研究を補完し、相補う研究が後続することに、審査員一同一致して高い期待が寄せられた。このように、近代日本文学におけるアイルランド文学の受容とその変容について、すぐれて実証的かつ歴史的な視点から論じた本研究は、従来の水準をはるかに超えるものである。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしい十分な価値を有するものと認定する。